

# ひょうご 水百景

No.59 大屋川（養父市小城）

～雪解け水の中、圧巻の川渡御・お走り祭り～



写真-1 大屋川の川渡御（小城橋上流にて平成27年4月撮影）

## ■ 但馬に春を告げる「お走り祭り」

「お走り祭り」（養父市指定無形民俗文化財）は、毎年4月中旬の土日に行われます。祭りの朝、「はっとうよござるか<sup>※1</sup>」の勇ましい掛け声とともに養父神社（養父市養父市場）を出発、重さ150kgもある神輿（みこし）を10人の氏子が担ぎ、集落を練り歩きながら20km離れた斎（いづき）神社（養父市長野字東山）にお参りします。祭りの朝、「ハットウ、ヨゴザルカ」とかけ声をかけ合いながら神輿は養父神社を出発。斎神社までの往復40kmの道のりを重さ150kgの神輿を担いでいきます。神輿がまるで軽く走っていくように見えたことから「お走り」という名が付いたといわれています。

※1 はっとうよござるか：お祝いのお餅のお分けする量が八斗（八はめでたい数）でよろしいか、という意味。「ようござるか法堂」の転訛したものとの説もある。法堂は神輿のこと。

## ■ 祭りの一番の見もの～大屋川の“川渡御”

途中、雪解け水が流れる大屋川（一級河川・円山川の左支川）を神輿を担いで渡る「川渡御（かわとぎょ）」（上の写真-1）が一番の見ものです。“川渡御”は神輿の禊（みそぎ）をするといった意味があるそうですが、毎年大屋川下流部に架かる小城（こじょう）橋のすぐ上流で行われ、それを見ようと大勢の人が訪れます。



写真-2 ウッ、冷たっ！！



写真-3 ウッ、重いなあ！！



写真-4 皆見てるから、がんばるか！！

川渡御が行われる4月中旬の雪解け水はまだ冷たく、川の流れにしばらく手を浸けるとしびれてくるほどです。10人の氏は、水に少し浸かって冷たさに体を慣らした後、神輿を担いで右岸低水護岸の階段を下り徐（おもむろ）に川に入って行きます。水は痛いほど冷たいので早く渡ってしまいたいところですが、対岸には200人を超えるギャラリーがカメラを構えているのでささっと渡るわけにはいきません。途中、行ったり来たりを繰り返して、水面幅約50mを15分近くかけて左岸高水敷に上がってきました。

### ■ 瀬戸開きのお礼参りが「お走り祭り」の由来

神輿ご一行がめざす齋神社は、聖武天皇の天平2（730）年の創立と伝えられ、足利時代山名氏の崇敬を受け、江戸時代は生野代官の信仰を得たとか。大屋川の右支川・建屋川（たきのやがわ）の上流にあり、主要地方道70号養父朝来線（やぶあさごせん）に面して石造の鳥居が建っています。鳥居の横にある社頭案内によると「お走り祭り」の由来は下記の通りです。

「神代の昔、円山川下流域は泥海であったため、何とかこの地が豊かな農地にならないかと但馬五社※2の神々が寄って相談されたところ、土木の神様である齋明神をお願いしてはということになり、その名代として養父大明神が鮭の背に乗って円山川から大屋川、建屋川と遡り、ちきり瀨からお願いされた。齋明神は快く引き受けられ、早速川を下り、円山川河口の瀬戸を切り開くと、泥海はたちまち引いて肥沃な土地が現れた。喜ばれた五社の神々は、再び養父大明神を名代として旧暦師走（12月）の末（ひつじ）の日と申（さる）の日にかけてお礼参りをされた」

お走り祭りは、この故事に因んで養父神社から齋神社へ「瀬戸開きのお礼参り」をするものです。しかし、旧暦の師走というのは厳寒期にあたるのでそんな時期に川渡御をするなんてとんでもないということで、明治10（1877）年からは4月15日・16日に変更されました。さらに、平成に入って以降のある時期から4月中旬の土日に変更されています。これは、担ぎ手の都合もありますが、大勢のギャラリーの中で川渡御をするほうが頑張れる、という意図もあってのことだそうです。



図-1 但馬明神五社位置図

※2 但馬五社：崇神（すじん）天皇の頃、但馬の国は乱れ、国守であった天日槍の孫・比奈良岐（ひならぎ）が朝廷に救援を願い出たところ、天皇は四道將軍の碓羽道主命（たにわのみちぬしのみこと）を遣わされ、地方の豪族たちと力を合せて悪者どもを退治された。その際、国が平和に治まるようにと、円山川流域の五ヶ所に約12km間隔で国の神社を造営された。これが但馬五社（網巻神社・出石神社・小田井縣神社・養父神社・粟鹿神社）である。

### ■ お走り祭りの巡幸ルート

養父神社から齋神社への巡幸ルートは下図-2の通りです。昔は、2日かかりとはいえ神輿を担いで全行程を歩いたそうですが、やがて地区間の移動は馬を使うようになり、それが人力車に変わり、今では自動車を利用しています。担ぎ手の高齢化、若者の減少による担ぎ手不足も影響しているのでしょうか。



写真-5 養父神社を出発「はっとう・・・」



写真-6 齋神社到着「やっと折り返しや」



写真-7 翌日養父神社本殿帰着「ヤレヤレ」



写真-8 広谷大橋から大屋川下流を撮影

養父神社を出発した神輿は、養父市三谷の厳島神社で斎神社の神輿と合流し練りあった後、養父市建屋で一泊。斎神社に参った後、再び建屋で2台の神輿は練り合って別れを惜しみ、それぞれの神社へと帰っていきます。



図-2 お走りの巡幸ルート

### ■ 昔の巡幸ルートはきつかった

お走りのルーツは、現存する資料から室町時代までは遡ることができるそうです。その室町期のご神体の巡幸ルートは、船で大屋川を遡上し山越える非常にきついルートだったとか。

『養父町史』等によると、養父神社のご神体を大屋川河口まで運び、そこから船で新津(しんづ)まで遡り、ここからは徒歩で平垣、熊野(ゆうや)、上山(うやま)高原、三谷のくしばを経て御祓山(みはらいやま)の牛頭天王※3(ごずてんのう)社(現・御井神社)にお参りし、森の力カナベを下って建屋の斎神社にお参りをしたとあります。山越えの巡幸はかなりの苦行だったようで、その道筋にあたる森地区の奥山にある「明神が森」で神輿ご一行が休憩したそうです。

これが江戸中期になると、大屋川から建屋川に沿って行く今日の巡幸ルートに近い道順、つまり養父神社⇒藪崎⇒小城(川渡り)⇒上箇(あげ)⇒広谷⇒十二所(川渡り:十二所井堰より十二所に渡る)⇒岩が鼻⇒稲津(川渡り)⇒城ヶ鼻⇒大坪⇒船谷⇒池山⇒松ヶ原⇒森⇒正町野⇒新町⇒町⇒野谷⇒斎神社(帰りも同じルート)になっています。

ただ、このルートでは、山越えはなくなっていますが川渡りが3箇所もあって、それなりにきつい巡幸になっています。またご神体は、当初養父神社の神主さんが身につけて廻ったそうですが、それが牛の背になり、馬の背、そして牛車(ぎっしゃ)と変わり、江戸時代になって現在のような神輿になったそうです。

※3 牛頭天王: 日本における神仏習合の神。釈迦の生誕地に因む祇園精舎の守護神とされた。天文年間(1532~1555年)に大火災に遭い、天文15(1546)年に再建、この時に山麓の旧大屋町宮本の現在地に下されたという。巡幸ルートの変更には、この天王社の移転が関係しているのかも。



写真-9 大屋川(十二所大橋から上流を望む)

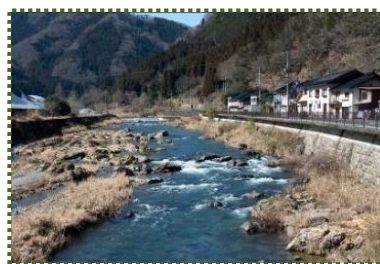


写真-10 大屋川(浅野橋から上流を望む)



写真-11 大屋川(新津・新大亀橋から下流を望む)

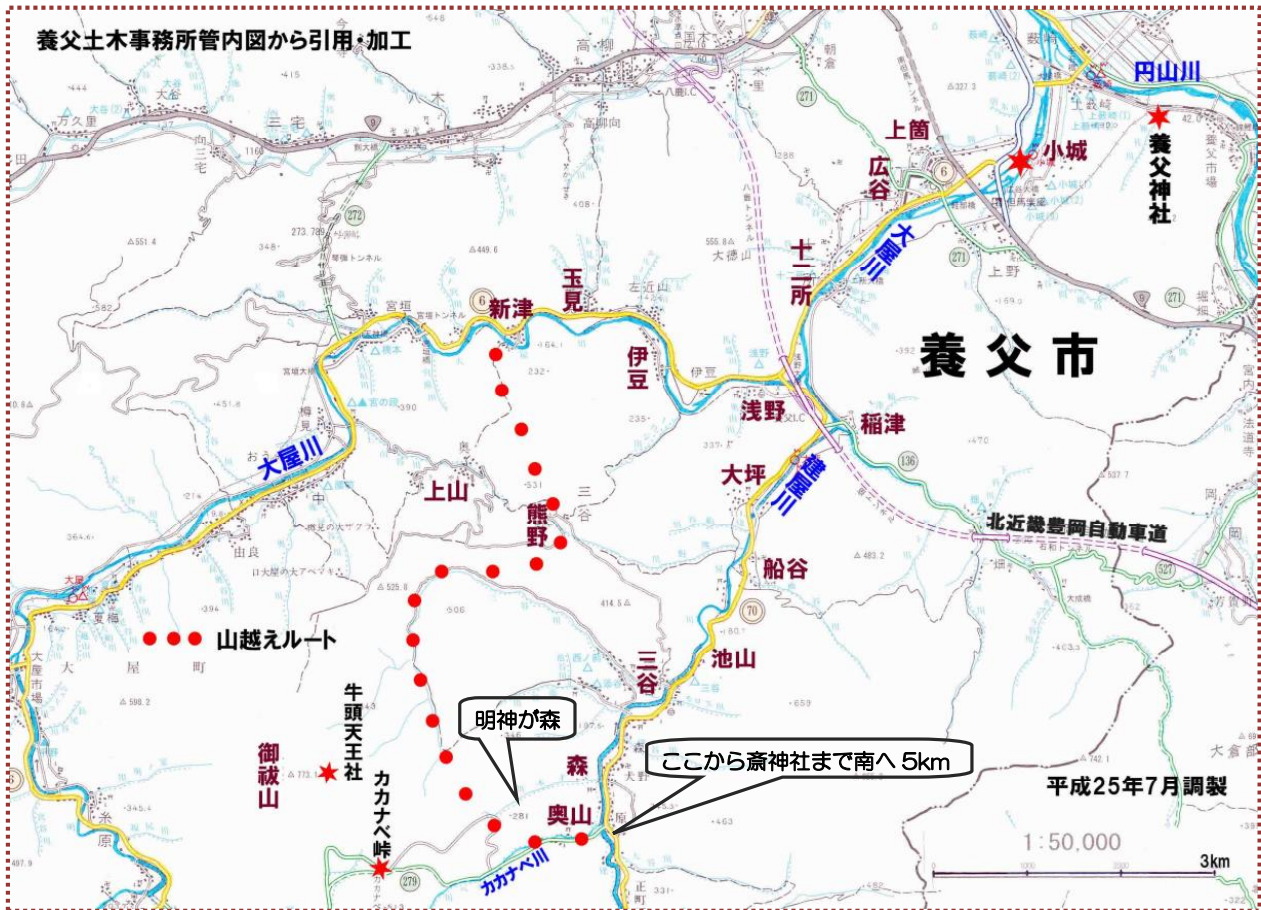


図-3 お走り祭り・山越えルート

### ■ 平成 21 年の兵庫県西・北部豪雨で“土木の神様”斎神社が被災

平成 21 (2009) 年 8 月の台風 9 号の影響で、建屋川上流域では 24 時間雨量 224mm、最大時間雨量 60mm (養父市長野観測所) を記録しました。この豪雨により“土木の神様”彦狭知命 (ヒサカリノミコト) を祀る斎神社の裏山で山腹崩壊が発生、多量の土砂と倒木が流出し、山の中腹に立つ斎神社の本殿や拝殿・幣殿※4 (ハいでん) が倒壊しました。土砂は、境内を 1~2m の深さに埋めて、さらに山麓を走る県道 70 号養父朝来線にまで達し、県道の通行にも支障が生じました。



写真-12 斎神社本殿周辺の被災状況



写真-13 斎神社拝殿の被災状況



写真-14 完成した本殿

崩壊発生後の溪流には不安定土砂や流木がかなり残っていたことから、溪流対策および流木対策を講じることとし、平成 22 (2010) 年 8 月から県単独緊急防災事業により谷止工 1 基、流木捕捉工 (スリットダム) 1 基、土留工等を実施、平成 23 (2011) 年 3 月に完成しました。



写真-15 完成した治山堰堤 (上流面)



写真-16 完成した治山堰堤 (下流面)

また、倒壊した本殿は屋根が前方に長く伸びる一間社流造※5（いっけんしゃながれづくり）でしたが、その屋根は柱から外れて地上に落下し、柱などは土砂の中に埋まってしまいました。修理は、できる限り元々あった柱材などを使うこととし、土砂の中から柱や桁を掘り起こして約3千点の部材を回収、修理して平成26（2014）年10月から組み立て作業が始まり、平成27（2015）年3月に完成しました。柱や桁は、約90%が元の部材を使用、復旧費の5千万円はすべて寄付金で賄われました。

なお、拝殿と幣殿についても、保険や住民による寄付では土砂の撤去や解体までが限界で、文化財ではないことから公的支援もなく（政教分離の原則）、寄付を募っているところですが、平成28（2016）年度中に拝殿・幣殿などの建物を完成させ、本殿にご神体を移す遷宮を行う予定だそうです。

※4 幣殿：参詣者が幣帛（へいはく）をささげる社殿。拝殿と本殿との中間にある。

※5 一間社流造：上賀茂神社、下鴨神社に代表される流造（ながれづくり）は、日本の神社建築様式の1つで、伊勢神宮に代表される神明造から発展し、屋根が反り、屋根が前に曲線形に長く伸びて向拝（こうはい、庇）となったもの。全国で最も多い神社本殿形式である。桁行（正面）の柱間が1間（柱が2本）であれば一間社流造、3間（柱が4本）であれば三間社流造という。

## ■ モノローグ

調べてみると、但馬にはこの「お走り祭り」の由来となった「瀬戸開き」伝説以外にも、出石神社に伝わる天日槍の国造り伝説をはじめとして似たような筋書きの国造り伝説がいくつか残されています。

但馬五社明神が円山川の開発について話しかった床尾山（とこのおさん）や円山川下流部が一望できる来日岳（くるひだけ）に登ってみたい気もしますが、そのためには、まず体重を何とかしないと…。体力は落ちる一方ですが、体重はなかなか落ちてくれません。



写真-17 齋神社へ奉納のお走り祭り絵馬（『養父町史』から引用）

なお、お走り祭りですが、最近は旗持ちを中止して神輿巡行同行者の規模を縮小するとともに、実施期間も1日間（日帰り）に短縮しているそうです。

### マムシグサ（蝮草）

明るい森林や谷沿いのやや湿った場所に生育するサトイモ科テンナンショウ属の多年草で雌雄異株。日本における天南星（テンナンショウ）の仲間はおよそ30種。似ているものが多く、特にマムシグサ系は分類が混乱していることもあり、素人では判別するのが難しい。『日本の野生植物～草本』を見ると、アオテンナンショウによく似ているが…。

マムシグサは、その名の通り茎がマムシの胴体の模様に似ていて、ヘビが苦手な筆者はドキッとすることがある。養父神社で撮影。



写真-18 マムシグサ

#### 【参考資料】

- 1 『円山川風土記』 但馬県民局 県土整備部 平成19年
- 2 『養父町史・第三巻（民俗編）』 養父町 平成6年3月
- 3 お走り祭り保存会 HP
- 4 『但馬の百科事典～お走り祭り』 公益財団法人 たんしん地域振興基金  
<https://www.tanshin-kikin.jp/tajima/233>
- 5 『お走りさん、牛頭天王、流造、マムシグサ』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

※発行：平成28（2016）年4月 『ひょうご水百景』No.59

改訂：令和8（2026）年3月 『ひょうご水百景』No.59